

書評

福田 晃 編

『沖繩地方の民間文芸』

野村 純 一

福田晃氏の編む『沖繩地方の民間文芸』は、昭和五十四年二月二十八日に三弥井書店から公にされた。〈概説論〉〈論攷編〉〈資料編〉の三部をもつて構成されている。五百九十八頁から成る大冊である。刊行後、今日までに一年有余を経た。けれども、この書物について直接これを探り上げた記事はいままで二つ三つ目に触れたに過ぎない。しかも、それらはいずれも限られた紙幅での紹介風の文章であった。同じことは、この後に上梓された山下欣一氏の『奄美説話の研究』（法政大学出版局）についてもいえる。抱込んで、強く訴えようとしている内容、そして何よりも最も活潑に取沙汰されて然るべき南島・沖繩に關しての今日的な問題の所在といった点からして、現在、この一冊に対する周囲の反応の鈍さにはいささか不満が残る。もっとも、いま私がこの種の感懐を述べるのは時機的に早過ぎるのかも知れない。あるいはまた、本書についての発言が少いとするのは、怠惰な私の目配りの不足を自ら暴露しているのかも知れない。それからして、拙いこの一文が活字になる頃にはここの一言が單なる杞憂に過ぎず、

『沖繩地方の民間文芸』

はたまたこれが不用意な勇み足であったのを悔恨、修正し得るようになってゐるのを望まずにはいられない。

『沖繩地方の民間文芸』は、「序」の中で編者の福田晃氏がここに至るまでの経緯と、そこでの姿勢について簡潔に所感を述べている。同時にそれは、六カ年にわたる沖繩での調査と研究の基本的な理念、ならびに具体的な方法を端的に示しているというところで、すでに通り一片の「序」の域を遙かに超えた内容を備えている。そこで本書を手にした場合、事に依ると人はまずこの「序」の部分から早くも熱い議論を必要とするかも知れない。そして事実それは元來が「事に依」ったり「かも知れ」ぬ、などといった曖昧さに終始してはならない重要な問題を擁している筈なのであるが、不幸にして今日まで私はまだその論議を知らない。

具体的にいつて、本書の編者福田晃氏は沖繩と従来の日本民俗学とのかわりようについて次のように記している。すなわち「沖繩における民間文芸の調査・研究は、主に本土の「古代」に繋がるもの、すなわち、原始信仰を内包する祭祀儀礼にともなう神歌や神話の伝承を対象として、進められてきた」と。したがって本土と沖繩とのこうした膠着した事情を是正し、別途新たな視点を導入するためには、何を措いても沖繩における民間文芸の調査、研究は、沖繩の「伝承実態に応じて、進めなければならぬ」と訴える。つまり、過去に培われた特定の概念や固定観念を払拭し、眼前の事実に改めて向き合えと説くのである。そして、

その上で氏はさらに、そのためにここでの「調査・研究の方向として提示したいのは、沖繩という地域の文化をいつも本土の「古代」に対座させて意義づける従来の観点をとりはずすということである」というように積極的に提言している。振返ってみて、いったいに柳田国男、折口信夫といった日本民俗学の先達、ならびにその後継者たちの方法は、なべて沖繩の中に即、本土の「古代」なるものを見出してきたのか、それともそこにいわゆる「古代」なるものの原型、もしくは原質とでも称されるものを発見してきたのか。こうした研究史への認識と解釈とは今日なお、必ずしも一様ならざる判断が存しよう。それからして私自身も、福田氏が選んでここに用いた「対座」といった表現には正直、幾分かの途惑いと併せて新たな疑義を抱かなかつたわけではない。もちろんそうだからといって、私ともここに氏の意図するところのものは、最早こうした言葉や表現上の問題なのではなく、それはすでに沖繩に立向ったときの具体的な学問の方法、またはそこでの基本的な理念の問題にあることは弁えているつもりである。

しかして反面、否、むしろそれなるが故に、思返せば過去の日本民俗学と沖繩とのかかわり合い、ならびにそれへの評価は今後一層深く検討、論議され慎重に位置付けられて行かなければならないと考えられるのである。

それにつけても、ここになされた具体的な福田提言はたして顔面通りにひとり日本民俗学の場合にのみ限って理解されるべきであろうか。私はそうは思わない。何故ならば、すでに触れてき

たように、これまでの日本民俗学は沖繩の中に直接本土の「古代」なるものを見てきたのか、それともいわゆる「古代」に相当するものの原質、原核といったものを見てきたのか。それはしばらく措くとして、ただ確實にいえることのひとつは、少なくともそこに惹起した民俗学の「古代」なるものとの交感、遭遇はやがてそれが日本文学の裡なる「古代」に援用、適合され、その結果国文学における古代研究はひとしきり沖繩との間に蜜月の時を過ごしてきた。これは紛れもない歴史であるからである。しかるに今日に至るまで、こうした方法についていかなる自省がなされ、かつ批判がなされたかとなると、私はほとんど知るところがない。いうなれば問題はこれまた依然今後の清算にかかわっている筈である。その意味で、さきに述べたいわずもがなの一言「周囲の反応の鈍さ」は、当然民俗学・国文学の両様にわたって理解されて差支えない。本書の「序」に示された福田提言を巡って、ひとたび実りある意見の喚起されるのを期待するのは、はたして私一人であらうか。

『沖繩地方の民間文芸』は、三部をもって構成されている。これは、冒頭に記した。〈概説編〉〈論攷編〉〈資料編〉である。ところで、中央に置かれた〈論攷編〉は、それぞれが各論ともいふべき性格を有し、かつ基本的にはその前に在る〈概説編〉を受けて、直接それに呼応、機能するべく順序立てられている。したがって、ここでの論文の内容と位置とはそもそもが南島・沖繩に

向ける編者の意志を直截に映しているといつても間違いない。

取められる論攷は「沖繩の御嶽と伝承」湧上元雄氏。「伊良部島比屋御嶽起源説話の問題」山下欣一氏。「宮古における龍宮説話の位相」丸山顕徳氏。「沖繩地方における百合若説話——竹富島の伝承と奄美沖繩伝承圏——」小林美和氏。「信太妻」の一源流——南島のシイミーの話とかかわって——美濃部重克氏。「沖繩地方の笑話——宮古島を中心に——」田中文雅氏。「首のない影」攷「松浪久子氏。「津堅島の女童——「取納奉行節」考——」池宮正治氏。「八重山諸島の歌謡」狩俣恵一氏。「琉歌覚書——中世近世歌謡史の一端として——」真鍋昌弘氏。以上の十篇である。

もっとも「以上の十篇である」とは、至極簡単にいったが、実際には散文伝承あり、韻文伝承あり、しかも当然の有様ながら論文のひとつひとつは独自の課題を果敢に追究しているわけで、読むに易からず、ましてや一括して評するのはまったく為し難い。言分げがましいが、それからしてここではそのすべてにわたって等分に言及するのは差控えたい。さらに世間一般の「書評」とは余程趣きを異にするが、この論文群に対処する方便として、私はひとまずこれを自分勝手に解きほぐし、再構成して望んだことを最初に打明けておきたい。事の成行き上、とりあえずこの間の事情を明かせば、散文にかかわる内容、韻文にかかわる内容の別は、おおよそそこので配列に沿い、その上で更にこれを別途、南に赴いて調査に携わった研究者の論攷と、他方、その土地の研究者の

それとに大別して当った。このついでに告白するに、たまたま私がこのような至極我儘勝手な操作をほどこすに至った動機は、ほかでもない。〈論攷編〉の冒頭に湧上元雄氏の「沖繩の御嶽と伝承」が置かれ、就中、その中で次の一節に出会ったからである。やや長くなるけれども、あえて引用しよう。すなわち〈南島の竜蛇信仰と御嶽〉の項に氏はいう。

半世紀前の呪術的伝承社会に育った筆者の少年時代でも、森の中の夜のしじまを破って、ハブの不気味で鋭い鳴声がきこえようものなら、祖母はきつと身ずまいを正し、声のする方向へ向い、「アイマダラ、マダラ。ヤママダラ、マダラ。ヤマヌウルチヌカミニ、カニティガタラ」（綾まだら、まだら。山の大神の神にあらかじめ告げよう）と、まず蛇身の美しさをたたえ、それでも人さまに危害を加えるならば、立ち所に、「ダキブチ、グンシー、スンジホウ」（竹の鞭か、青竹をお見舞い申すぞ。尊？義方）と、ハブ除けの呪文を高らかに唱えるのであった。「義方」（父の子に教訓する意）とは、流行病やハブ除けのまじないの文句である。また「アママダラ」（アイマダラとも）の言葉は、奄美から八重山までの数多いハブ除けの呪文における呼びかけの文句である。この語は、古代神歌のオモロでは、「あやもどろ」となって美しい着物を意味し、「あけもどろ」、「あけもどろのはな」は、あの日の出の瞬間の壮観をたたえる美称語となっている。旧暦三月三日の浜下り行事に付会するアカマタ伝説の主人公アカマター（あかいまだらの蛇。毒弱い）

は美男に化け、女をたぶらかすというが、奄美でマツタブとよぶのも、錦色に輝くマダラハブの意であらう。

というまでもなく、この一節はハブ・神使・古代歌謡・オモロ・日の出・浜下り行事・アカマタ・伝説といった具合にことごとくが沖繩そのものを象徴する語彙から成っており、それはなお現在の沖繩の日常にそのまま機能して、間断するところがない。しかも氏の一文はほとんど沖繩の心情といったものを代弁している、美しい。余計な言葉を挟むが、この部分はまさに本書全体を貫く圧巻だとしても過言ではなからう。

しかし、もともとこうした体験的な生活実感にもとづいて、歴史的な伝承事実に遡及して行くのは、その土地に生まれ、その土地に育った者のみに与えられた民俗学天賦の方法であり、それがために反面、その間の手続きには容易に第三者の介入を許さないのが普通である。したがって、元来が遠来の客たちには求めてもおおよそ手の届かぬ手立てのひとつであった。編者が劈頭に湧上論文を据えた心持は、私にはよく判るような気がする。

「津堅島の女童」の池宮正治氏の論文は、夙に親しまれている物語歌謡の〈取納奉行節〉について、今日「ようやく難解になりつつある歌句の意味をさぐるとともに、伝承の過程における変化」を追尋するべく試みられたものである。手続きとしては現在広く行われる『琉球民謡』所収の歌詞と、そこに至るまでの過程を確認する上で不可欠の資料である『竹柏園本琉歌集』ならびに『琉球大歌集』所収の歌詞とを示し、これらを詳細に比較した上

で、そこに纏綿したと察せられる寓意、暗喩を引き出して成果をみせている。殊にそれが著しい効果を挙げているのは第十一節にあった。氏の方法は一見些事とも見受ける細かな語句の変化を丹念に辿りつつ、それでいて僅かな語意変容の結果が、やがて歌詞全体にいかなるずれをもたらし、さらにそれが〈取納奉行節〉自体の位置をどのように変えて行くか。そういった大局的な見解に通じていて、快い。その意味で池宮論文は「体験的な生活実感にもとづき」ながら、同時にその間の手続きは第三者にも開かれているという美点を備えている。体験的な実感にもとづきながら、学問的に一層開かれた視野を備えているというのは、私共にはまことに歓迎すべき傾向である。狩俣恵一氏の「八重山諸島の歌謡」は、土地に行われる歌謡の全体像を捉え直そうとする試みである。その情熱には好感がもてるが、私の読み取る限り、論者の特性は備えて与えられた音感の鋭さにある。ここでそれが最も良く顕れているのは〈ゲジラバ〉の項であらう。氏の今後音楽的な感性を基調にした歌謡研究を期待するのは私一人であらうか。

つぎに、遠くその地に赴いて調査・研究に携わった研究者の側から、殊に散文伝承に関する面では、小林美和氏の「沖繩地方における百合若説話」に私は関心を抱いた。小林論文は末尾に「永積（安明）氏が水納島の伝承によって提示された枠よりも、いまだ少し沖繩の百合若伝承の範囲を広げる可能性を示すことができたようにも思う」と記して、なお新資料採集の可能性を示した。これは松浪久子氏の「首のない影」攷」も同様で、すでに記した

狩俣氏ともども、若い人々がより広い視野からしかも新資料を提示しての発言は、爽やかである。就中小林論文は先行する永積安明氏の論考を批判しつつその上で展開されており、全体に清新な批評精神が感じられて、好ましい。しかるに反面、氏の場合「百合若説話」を標榜していながら、何故にはやばやと「論をすすめる便宜上、一節を設けて、わが国における各地の百合若伝承を主として昔話資料集によって」といったように「主として昔話資料集」に拠ってしまったのか。正直いってその前提たる「便宜上」の意味と理由が私にはよく判らない。それというのも永積氏の論はもともと「主として昔話資料集」に拠ってなされていたものではなく、また事実論者自身もここの表題は明らかに「百合若説話」を表明しているからにはかならない。したがって私にいわせればこの場合、立論の根拠に説得力を欠く憾みがあり、さらに資料処理の段階にあって昔話資料集を主としたことへの自制が最初に必要なではなかったかと思う。それはともかくも「百合若説話」は早くから多くの研究者の関心と呼び、かつ、比較民族学の面からも盛んに論議されてきた問題である。永積論文のみに拘泥することなく、さらに沖繩地方の新資料を発掘して、百合若伝承の研究に刺戟を与えてもらいたいと思う。

ここに至って最早紙幅に余裕はなくなった。すでに言い置いたように「論攷編」に対処するに当って、とりあえず私は恣意的な組替えをほどこした。内在する決定的な理由は那邊に存するのか

判然としない。しかし少なくとも、本書の「論攷編」はおおよそ韻文伝承に関しては偏して土地の研究者に多く、他方、散文伝承については赴いてその地に及んだ研究者の側に傾いていたかの印象が強い。しかもそれは、私のように意識的に仕分けて読んだ場合、その譬え方はいかにも不様だが、土地の研究者の論攷はなべて語彙、語感といった言語活動を基調にこれを「体験的な生活実感にもとづいて」整理、構築し、その結果はいかなれば自己の裡なる沖繩により深く、より沈潜して自足、完結しようとする趣きにある。これに対して一方、そこに至った旅人の研究者たちは、当然のことながらひとたび遭遇した異質の対象に向き合って、新たな感歎と共に自己覚醒の契機を得ている。そこで改めてこの異質の相手を捕捉するべく、具体的手法としてはいったいに、主題、もしくは型といったものをやや図式的にとらえ、その上で他者と比較しつつ分類、位置づけようとする姿勢をみせている——もっとも、そのときにたとえ山下欣一氏のように、実に両様に及び、なお独自の位置を確保されている例も実際に存するが、こうした立場は求めても容易に叶えられないのが現実である——という具合に私はそのおおよそを理解した。そして「論攷編」のこうした在りようは、いずれ福田晃氏が「昔話」の稿で開口一番「本土における昔話採集のままに、南島を訪れて驚くのは、その予想以上の風土の違いとともに、それにもなう言語の差異である」といったその一条に尽きるのではなかったろうか。それからして、言葉の壁に挑戦しつつ、こうした大冊を編むにいたったま

での努力に対して、私共はひとしく敬意を表したい。

最後に添えるが、本書の「概説編」は「昔話」福田晃氏。「伝説」遠藤庄治氏。「歌謡」比嘉実氏。「諺」八重山地方の場合——」岩瀬博氏。以上の四氏が担当していて、余すところがない。

(のむら・じゅんいち 国学院大学助教授)

昭和五十五年五月二十五日印刷
昭和五十五年五月三十日発行

論究日本文学 第四十三号

編集兼 立命館大学日本文学会
発行者 福田 晃

印刷所 京都市下京区七条

御所ノ内 中町五〇

中 村 勝 治

発行所 京都市北区等持院北町二

立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。なお、領収証は振替払込票をもって、これに代えさせていただきます。

会 費 二千円 (卒業生・大学院生)
千五百円 (学部学生)

〒六三 京都市北区等持院北町二八

立命館大学文学部内

立命館大学日本文学会

振替 京都三八八三番